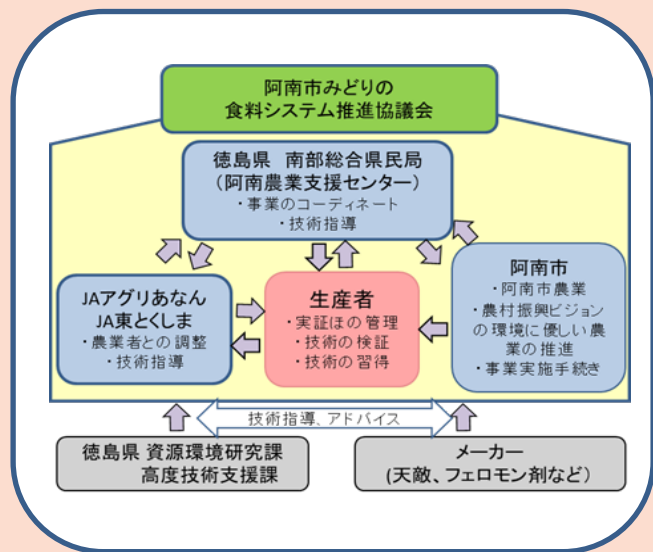


- 阿南地域は、県内屈指の施設園芸地域であり、きゅうり、いちご、かんきつの栽培が盛んである。どの品目も近年薬剤抵抗性を持つ難防除病害虫の発生による収量及び品質への被害が大きく、産地として効果的な防除技術が喫緊の課題となってきた。
- そこで、天敵、フェロモン剤を活用したIPM技術の実証と普及を目的に、**農業支援センターが中心となり、阿南市と管内の2JAと協議会組織を立ち上げ**”みどりの食料システム戦略”の実現に向けグリーンな農業体系への転換を推進している。

具体的な成果

1 協議会を核としたIPM技術の実証

- 個々の組織がそれぞれの品目で取り組むのではなく、協議会組織を核とし、品目の枠を越え、一体となってIPM技術の実証、普及に取り組んだ。



① IPM技術の現在の取組面積と令和9年度の目標面積(ha)

	きゅうり	いちご	かんきつ
～R3 IPM技術を活用した栽培に取り組んでいる面積	2	4	3.5
R4新たに天敵を導入した面積	4.1	2.2	2.5
R4フェロモン剤を活用した面積	7	5	9.4
IPM技術の導入目標面積	7.5	6	7.2

※かんきつは、みかん、すだち、不知火

※かんきつで導入したフェロモン剤は、ヨトウコンH、ハマキコンNで、のべ面積

普及指導員の活動

- **関係機関と連携し、協議会を設立するとともにIPM技術導入推進体制を確立**

- グリーンな栽培体系への転換サポートを活用したIPM技術の実証展示ほを設置。

- ① 天敵の導入
- ② 交信攪乱フェロモン剤の設置等



- 導入効果を高めるため、メーカーとの協議、現地検討会の実施など**細かな指導により、生産者への理解が深まった。**

普及指導員だからできたこと

・ 専門技術を持ち、現場に精通しているからこそ、関係機関をまとめ、メーカーとの協議や生産者に向けた講習会を重ねることが可能となり、**生産者へIPM技術導入への理解を深めることができた。**

・ **生産者との信頼関係があるからこそ、大規模実証が可能となった。**

別紙（詳細資料）

徳島県

I P M技術導入による施設園芸の生産安定

活動期間：令和４年度～継続中

１．取組の背景

阿南地域は、温暖な気候と豊富な日照量を活かした施設園芸が盛んであり、中でもきゅうり、いちご及びかんきつ類の施設栽培は生産額が多く、当地域における中核的品目である。しかし、近年の地球温暖化に起因する異常気象や自然災害の多発による減収に加え、農業資材・燃料・電力価格の高騰などによる先行き不安から高齢農家の離農が加速しており、産地の脆弱化が進んでいる。

各品目にはそれぞれ生産を不安定とする要素があるが、施設栽培における共通事項として、薬剤抵抗性を持つ難防除病害虫の発生による収量及び品質の低下が喫緊の課題となっている。この対策として平成２７年度からI P M（総合的病虫害および雑草管理）を推進し一定の効果は得られているが、生産の安定化とコスト低減を図るため、更なる技術確立が求められていた。

２．活動内容（詳細）

（１）推進母体の設立

持続可能なブランド産地の維持拡大に向け、地域ぐるみでの推進を図ることを目的とし、関係機関（J A、阿南市、農業支援センター）が一体となり、各生産部会代表者を含めた「阿南市みどりの食料システム推進協議会」を設立した。

（２）展示ほの設置と導入推進

グリーンな栽培体系への転換サポート事業（以下グリサポ事業）を活用し、I P M技術の実証展示ほを設置した。

各品目の共通技術として、広域的なハスモンヨトウ対策のためフェロモン剤を設置するとともに、品目毎の技術対策として、

①きゅうりでは、難防除病害虫（ミナミキイロアザミウマ、黄化えそ病）の抑制のため、平成２７年度より天敵タバコカスミカメ、スワルスキーカブリダニの導入が図られ効果が認められたものの、タバコカスミカメの自給体制に課題が残っており、グリサポ事業によりスワルスキーカブリダニ及び新たな天敵としてリモニカスカブリダニの導入効果を検証。

②いちごでは、ハダニ対策のために平成２７年度より、ミヤコカブリダニと

チリカブリダニの2種類が本格的に導入され効果を上げているものの、アザミウマやアブラムシ等の対策に課題が残っており、グリサボ事業により各種害虫用の天敵利用と微小害虫侵入抑制対策を含めたI P M技術について検証。

③かんきつ類においては、ハマキムシ、ハダニ対策として、フェロモン剤の利用と天敵の導入効果を検証。



天敵農薬メーカーとの協議



事業導入に向けた農家説明会



I P M技術導入講習会



先進地調査



天敵導入時の様子（きゅうり）



天敵導入マニュアル

3. 具体的な成果（詳細）

・きゅうり（フェロモン剤：46戸7ha、天敵：41戸4.1ha）、いちご（フェロモン剤：40戸5ha、防草シート：21戸2.5ha、天敵：16戸2.2ha）、カンキツ（フェロモン剤：56戸9.4ha、天敵：15戸2.5ha）においてI P M技術の実証展示ほを設置し、技術の導入拡大を進めることができた。

・また、技術導入にあたって、天敵農薬メーカーと連携することにより、天敵導入マニュアル3編（きゅうり、いちご、カンキツ）を作成できた。

・今回の取組を通じ、みどりの食料システム戦略について、関係機関、農業者

への周知が図られた。

4. 農家等からの評価・コメント（阿南市きゅうり農家 Y氏）

今作は前作に比べて、ミナミキイロアザミウマやヨトウムシの発生が抑えられているので、フェロモン剤や天敵の効果は得られたように感じる。ただ、天敵は1株ずつ放飼するので時間がかかることや、使用可能な農薬が制限されることが難点であった。このまま病害虫が抑えられるのであれば、次作からも導入したい。

5. 普及指導員のコメント（阿南農業支援センター 安達凜奈）

関係機関が一体となり、協議会を設立し、メーカーとの協議や生産者に向けた講習会を重ねることで、各品目において IPM 技術導入への理解が深まったように感じている。また、実際に導入することで、効果を実感したという声も多く上がっているので、今後も導入マニュアルを活用しながら、IPM 技術の定着支援を進めていきたい。

6. 現状・今後の展開等

I P M技術導入により一定の効果が得られたものの、技術導入に伴う経費負担も増えるため、薬剤防除回数削減に伴う省力化の観点も含めた費用対効果を検証し、地域に合った I P M技術の確立を目指す必要がある。

生産安定と省力化を図るため、引き続き、I P Mの普及を推進する。また、その他品目についても、肥料高騰対策や環境負荷低減に向けた技術の検証と普及を図り、農業経営の安定につなげる。